

第46回城戸賞応募作品

「BAD HERO」

金田靖

生きる意味を得るための手段は、どこまで許されるのか。

パラスポーツは誰の、何の為にあるのか。

世界の頂点を目指す、車いすテニスプレーヤーのルイ（松永類）。彼は以前、プロのテニスプレーヤーであったが、病気の為、右足を切断。車いすテニスに転向した。

ルイは1年も経たずに、先輩のツヨシ（木坂剛）と並ぶ車いすテニスのトッププレーヤーへと駆け上がる。女子アウンサーの杉山モエという彼女も出来る。

順調に行くかに見えた、ルイの車いすテニスプレーヤー人生。しかし、パラリンピックの出場権が掛かった重要な大会の直前に、週刊誌に記事が出る。

そこには、「松永類は作られた障がい者だった」と書かれている。

ルイの右足の病気は嘘だった。その1年半程前、ルイは、右膝の度重なる怪我によりプロとしてテニス続ける事が不可能に。テニスに人生の全てをかけて来たルイは生きる意味を失い、自暴自棄になっていた。その時、コーチの伊達の提案により、自らの意思で右足を切断。新たな生きる意味、目標を得る為、車いすテニスに転向したのであった。

ルイの行為、倫理観に対して、世間では非難が渦巻く。ツヨシもルイの行為を激しく非難。世論を気にする大会本部から、出場の辞退を求められる。

ルイは、モエに頼み、独占インタビューを放映して貰う。

そこで「パラスポーツはスポーツでは無く福祉事業なのか？」スポーツであれば同じ条件

で戦い、勝てば問題ない筈だ。そのために足を切った「俺を締め出してぬるま湯で争うつもりか」等の自論を展開し、ツヨシと世間を挑発する。

ツヨシは、ルイが出ないのであれば、自らも出ないと宣言し、ルイの出場が認められる。

迎えた大会。決勝は予想通り、ルイとツヨシの対決に。激闘の末にツヨシがかるうじて勝つ。

ルイは悔しさを反面、ツヨシというライバルの強さに倒しがいを感じ、喜ぶのであった。

登場人物表

松永類／ルイ（23、24）車いすテニスプレイヤー。閉塞性動脈硬化症で右足を切断。
木坂剛／ツヨシ（25、26）先輩車いすテニスプレイヤー。日本のナンバー1プレイヤー。先天的に左足を欠損。
織田健太郎／ケンタロー（25、26）先輩車いすテニスプレイヤー。バイクの事故で下半身不随。
杉山モエ（27）ルイを取材する女子アナ。
石黒（43、44）車いすテニスのコーチ。
伊達（55）ルイのプロテニスプレイヤー時代のコーチ。
沢田（35）週刊誌の記者。ルイの取材をしている。
山城（23）ルイのプロテニスプレイヤー時代の友人。
錦戸親子（10、40）ルイのファンの親子。息子は車いすに乗っている。
城所部長（50）ルイの会社の上司。
松永五月（45）ルイの母親。

○車いすテニス試合会場／海外／外観

アジア某国で行われているアジアパラ競技大会。

車いすテニスの試合が行われているスタジアム。中から、歓声が聞こえている。

○車いすテニス試合会場／海外

スタジアムの中では、車いすテニスの決勝戦が行われている。

注目度の高い一戦に、多数の観客が詰めかけている。

主人公の金髪のルイ（24）、車いすに乗ってプレイしている。

対戦相手は、黒髪のツヨシ（26）。

2人の激しいラリーが続く。

ツヨシ、見事なショットを決める。

ツヨシ「…」

ツヨシ、クールな表情を崩さない。

観衆「ウオー！」

観衆、大きな拍手と歓声。

ルイ「くそっ！」

ルイ、激しく悔しがる。

× × ×

ツヨシ、小さく息を吐いて、サーブを打つ。ルイ、返す。

2人の激しいラリーが、再び続く。

今度は、ルイがショットを決める。

ルイ「見たか！」

ルイ、高々と左手を上げてガッツポーズ。

ツヨシ「…」

ツヨシ、悔しさを見せず、表情を崩さない。

観衆「ブー！」

観衆、ルイのポイントに対しては、大きなブーイング。

ルイ「…フッ」

ルイ、ブーイングの溢れる観客席を見上げて、不敵に笑う。

× × ×
女子アナウンサーの杉山モエ（27）、
観客席で2人の対戦をじっと見ている。
車いすに乗ったケンタロー（26）、観
客席の通路で楽しそうに見ている。
沢田（35）、観客席の片隅で、腕を組
んでじっと見ている。

× × ×
ツヨシ、ショットを決める。

観衆「ウオー！」

観衆、大きな拍手と歓声。

× × ×

ルイ、ショットを決める。

観衆「ブー！」

観衆、大きなブーイング。

× × ×

ツヨシの強烈なショットが、決まる。

ツヨシ「…」

ツヨシ、クールな表情のまま。

ルイの車いす、勢い余って転倒する。

観衆「ウオー！」

観衆、大きな拍手と歓声。

○錦戸親子の自宅／リビング

家のテレビで試合を見る錦戸親子（1
0／40）。

錦戸息子「…ああ」

車いすの息子、ルイがポイントを奪わ
れた事を悔しがる。

○車いすテニス試合会場／海外

転倒したルイ、起き上がる。

強く相手を睨みつけるルイの顔の上に

タイトルIN。

タイトル「BAD HERO」

× × ×

次は、ルイのサーブ。

ルイ「ぜってー、負けねえからな…」

ルイ、呟き、ブーイングをパワーにす
るかの様にサーブを打つ。

ツヨシ、返す。
激しいターンで軋む車いすの車輪。
放たれる強烈なシヨット。
歪んだボールがバウンドして加速する。
飛び散る汗。
そこには、スポーツとしてのダイナミックな車いすテニスの姿がある。
ルイとツヨシ、2人の激しいラリーが続く。

○黒にスーパー
S「1年前」

○テニスセンター／外観
郊外にある大きなテニスの練習センター。
その中にはテニス及び、車いすテニスをプレイする人々が。

○テニスセンター／駐車場
駐車場に車が入って来る。運転するのは伊達（55）。
駐車スペースに入ると、助手席から義足をはめたルイ（23／この頃は黒髪）が降りて来る。
慣れない義足で歩きづらそうなルイ。
伊達「手伝うか？」
ルイ「大丈夫です」
ルイ、伊達を止めて1人でゆっくりと歩く。

○テニスセンター／ロッカールーム
ルイ、右足の義足を外して、苦労しながら、テニス用の車いすに乗り換える。

○テニスセンター／テニスコート
ルイ、他の車いすテニスプレイヤーの前で挨拶をしている。
ルイ「はじめまして、松永ルイです。半年前までプロのテニスプレイヤーだったん

ですけど……」

ケンタロー「噂の元プロか……」

ツヨシ「静かに聞けよ……」

茶々を入れるケンタロー（25）、止めるツヨシ（25）。ルイ、仕切り直して、挨拶を続ける。

ルイ「えーと、閉塞性動脈硬化症という病気に掛かってしまいました、足を切断しました。車いすテニスを始めたくて、今日から、こちらにお世話になる事にしました」

ルイ、強い表情で宣言する。

ルイ「僕の目標は、車いすテニス界、初の男子シングルス年間グランドスラム制覇と、パラリンピック3連覇。それが出来る様に頑張るといふか、必ずやります！」

ケンタロー「（笑）……デカイこと言うじゃねえか」

ルイ「よろしくお願いします！」

ルイ、大声で挨拶を切り上げ、頭を下げる。

一同「……」

一同、ポツポツと拍手をする。ツヨシ、1人だけ大きな拍手をする。

× × ×

ツヨシ、ルイに近づいて来る。

ツヨシ「どうも、木坂ツヨシです。よろしく」
ルイ「松永ルイです。よろしくお願いします」

2人、握手をする。

ツヨシ「お互い頑張ろう」

ルイ「はい、木坂さんの日本ランキング1位、早く抜ける様に頑張ります」

ツヨシ「……（笑）簡単には抜かされない様に、頑張るよ。まあ、よろしく」

ツヨシ、爽やかな笑顔で去って行く。

× × ×

車いすテニスのコーチの石黒（43）
石黒は車いすに乗っていない、コート
の片隅でルイに車いすテニスの基礎を
教えている。

石黒「車いすテニスで大事な事は？」

ルイ「…」

石黒「普通のテニスと違って2バンまでOS
だ」

× × ×
インサート。テニスコートで、2バウ
ンドでラリーする車いすテニスプレー
ヤーたち。

× × ×
ルイ「それくらい知ってますよ（笑）」

石黒「（笑）そりゃそうか」

ルイ「…」

石黒「大事な事、それは、チェアワーク。つ
まり、車いすの扱いだ。車いすを身体の一
部と感じるまでにしなければならぬ」

ルイ「はい」
石黒「そして、車いすは普通の足と違って左
右には動けない。だから、場所を予測して、
相手の打つ前に動き出さなければならぬ
い」

ルイ「はい」

石黒「テニスの技術と、チェアワークと、予
測能力。この3つで車いすテニスの勝敗は
決まる！じゃあ、まず、スパイダー、やつ
てみよう」

ルイ「…スパイダー？」

石黒、コートにコーンを置く。

石黒、自らも車いすに乗り、手本を見
せる。

石黒「こうして、このコーンを8の字で回る
んだ」

ルイ、石黒の動きをじつと見ている。

石黒「松永くん、ちよつとやってみて。本当
はラケットを持つんだけど、まずはラケッ
トなしでいいから」

ルイ、不器用ながらも、スパイダーを
始める。ゆっくりだが、何とか8の字
を描く。

石黒「そうそう…出来るだけ速く」

ルイ、スパイダーを繰り返す。

石黒「ツヨシ、ちよつと、いいか！」

石黒、大声でツヨシを呼ぶ。ツヨシ、
2人の元にやって来る。

ツヨシ「はい」

石黒「ちよつと、手本、見せてやってくれな
いか？」

ツヨシ「いいっすよ」

ツヨシ、右手にラケットを持ちながら
も、ルイとは比べ物にならないスピー
ドで8の字を描く。

ルイ「…」

石黒「目指すのはこのスピードだ」

× × ×

ルイ、1人でスパイダーをひたすら繰
り返す。徐々に日が暮れて来る。

× × ×

日も落ちて照明が点り、ナイターに。
ツヨシとケンタローがラリーをしてい
る。

スピード感溢れる2人のラリー。

ルイ、コートの外から、ラリーを見て
いる。伊達が横にやって来る。

伊達「いいか、ルイ。お前は少なくともあの
2人を抜かなければならない」

ルイ「…」

伊達「出来るだけ早いうちに」

ルイ「はい」

ルイ、2人のラリーを睨む様に見て、
目を離さない。

○テニスセンター／テニスコート

数週間後。ルイ、石黒の打ったボール
を追い掛けている。

確実に以前より、上達している。

石黒の打ったボールに追い付く様にな
って来ている。

石黒「車いすは絶対に止めるな！」

ルイ「はいっ！」

石黒「動いた状態でボールを待て！」

ルイ「はいっ！」

× × ×

休憩中。石黒、ツヨシとケンタローと、コート隅で雑談をしている。

ツヨシ「どうつすか、ルイ？」

石黒「大分、チェアワークが慣れてきた。まあ、テニス自体は才能あるしなあ……」

ケンタロー「俺が練習見てもいいですか？」

ツヨシ「大丈夫か？」

ケンタロー「いいから」

ケンタロー、ツヨシの心配を無視して、去って行く。

× × ×

ルイの元にケンタローがやって来る。

ケンタロー「上手くなったら楽しいじゃねえか。

俺が練習相手になってやるよ」

ルイ「あっ、はい。お願いします！」

× × ×

ルイとケンタローの練習が始まる。

石黒とツヨシ、心配そうにコートの外から見ている。

ケンタロー「いくぞ！」

ケンタロー、本気でサーブを打つ。

ルイ、追いつけない。

ケンタロー「全然、上手くなってねえじゃねえか！」

ルイ「もう1回、お願いします」

ケンタロー「何度でもやってやるよ」

再び、ケンタロー、本気のサーブ。

ルイ、車いすの操作が間に合わず、身体に当たってしまったって返せない。

ルイ「くっそ！」

ケンタロー、次々とサーブを打つ。

ルイ、追い付けない、身体に当たってしまう。全く返せない。

× × ×

ケンタロー「お前、サーブ打ってみろよ」

ルイがサーブを打ち、ケンタローがリターンを返す。ルイ、リターンに追いつけない。

再び、ルイがサーブを打つ。ルイ、ケンタローのリターンに追いつけない。

ケンタロー「元プロさん。これくらい簡単に返せねえと、グラランドスラムも、パラリンピックも難しいぞ」

ルイ「もう1回お願いします！」

× × ×
ルイ、何度もサーブを打つが、ケンタローのリターンに全く追いつけない。

ツヨシ「そろそろ、いいだろ」

ルイ「…はあはあ、まだ行けます」

ルイ、息も絶え絶えだが、目は死んでいない。

石黒「ケンタロー、ルイ、もう終わりだ！」

石黒が止めに入る。

○テニスセンター／コート外

ルイ、スポーツドリンクを飲んでいる。
ケンタローは堂々とタバコを吸っている。

ルイ「タバコ吸うんですね。アスリートなのに」

ケンタロー「ほっとけよ。何が、アスリートだ」

ルイ「…」

ケンタロー「まだ、アスリート気分か？俺みたいな2流のショットも返せなかったのに」

ルイ「…」

ケンタロー「元プロが聞いて呆れるな」

ルイ「…」

ケンタロー「グラランドスラムも、パラリンピックも、何年掛かるか分かったもんじゃねえな」

ルイ「はあ？」

ケンタロー「早いとこ、諦めた方がいいぜ」

ルイ「うるせえよ！」

ルイ、ケンタローに殴り掛かる。

ケンタロー「何だよ！」
ルイとケンタロー、取っ組み合いになる。

ツヨシ「やめとけって！」

ツヨシや他の選手が、止めに入る。
ルイとケンタローを中心にみ合う。
ケンタロー「何が元プロだ！」
ルイ「お前にはぜってえ、勝ってやる！」

○公園（夜）

ルイ、1人で練習している。
壁打ちをしている。
延々と続く、ルイ1人の練習。
夜の公園にこだまするボールの音。
ルイ、疲れて、練習を止め、夜空を見上げる。ルイ、呟く。
ルイ「俺は、車いすテニスを変えるために生きていく……」
ルイの手は、車いすの操作によって、皮がめくれ、ポロポロで血だらけになっている。

○ルイの自宅（夜）

別の日。ルイの1人暮らしの簡素な部屋。ルイのスマホが鳴り、出る。
ルイ「もしもし、えっ？」
ルイ、啞然としている。
ルイ「…マジかよ」
ルイ、小声で呟く。

○葬儀場（夜）

お通夜が行われている。
ルイ、焼香をする。
祭壇には伊達の写真。
× × ×
ルイ、葬儀場を後にする。
慣れない義足でゆっくりと歩いている。
プロテニス時代の友人、山城（23）が話し掛けて来る。
山城「おお、ルイ、久しぶりじゃねえか」
ルイ「ああ、山城か」
山城「いきなりだったな」
ルイ「事故って、現実感、全然ねえよ」
山城「…涙も出ねえな」

ルイ「…ああ」
山城「聞いたぜ。お前も、大変だったらしいな」

山城、ルイの引きずる右足を、ちらつと見て。

山城「義足か？」

ルイ「…ああ、まだ慣れなくてな」

山城「俺たち、お前に期待してたんだぜ。100位まで行ったんだもんな。グラندスラム獲るとか騒いでさ。ホントに獲るんじゃないかかって」

ルイ「…」

山城「勿体なかったな」

ルイ「仕方ねえよ」

山城「ごめん…言い方悪かった。今、何してんだ？」

ルイ「最近、車いすテニスしてるんだ」

山城「へえ」

ルイ「普通のテニスじゃ無理だったけど、こっちでグラندスラム、獲ってやるよ。4つとも」

山城「あのさあ…、それってどれくらい価値があるんだ？」

ルイ「…」

山城「出来れば、普通のテニスの方で獲って欲しかったなあ…」

ルイ「…もう、それは無理なんだよ」

山城「ごめん、また変な事言ったわ。またな」
ルイ「ああ」

ルイと山城、別々の道に別れる。

○ルイの自宅（夜）

ルイ、写真を見ている。

写っているのは、伊達コーチと、プロテニスプレーヤー時代のルイ。

ルイ「伊達さん、何でだよ…」

ルイの頬に涙が流れる。

ルイ、自分の途中で無くなった右足をじつと見る。

○ビル外観

とあるお菓子メーカーのオフィスの入った高層ビル。

○オフィス

スーツ姿のルイ、大量の書類を抱えて義足で歩いている。慣れない義足で遅い。

ルイの前を歩く、城所部長（50）。

城所部長「松永くん、急いで」

ルイ「はい」

城所部長「遅いよ」

ルイ「はい」

ルイ、義足で急いで歩いている。

しかし、つまずいて、書類をばらまいてしまう。

城所部長「何やってんだよ、全く」

ルイ、必死に書類を拾い集める。

ルイ「すいません」

城所、舌打ちし、嫌味を言いながら、書類を拾い集める。

城所部長「全く、何だってこんなの採用したんだよ……」

ルイ「……」

ルイ、嫌味を聞き流し書類を拾い集める。

○テニスセンター／コート

ルイとケンタロー、試合形式の練習を始める。

石黒とツヨシ、コートの外から見ている。

ツヨシ「また、やるんですか？」

石黒「ああ、止めたんだけどな。どうしてもやりたいんだって」

ツヨシ「……」

石黒「ルイが」

× × ×

ケンタロー「いくぞ！」

ケンタローがサーブを打つ。ルイが返

す。ラリーが続き、ルイがショットを決める。ルイのポイント。

ルイ「よしっ！」

ツヨシ「ルイが取った」

石黒「…」

再び、ケンタローのサーブ。ラリーの後、ルイがショットを決める。再びルイのポイント。

ルイ「よっしや！」

ルイ、派手なガッツポーズを見せる。

ケンタロー「やるじゃねえか」

ケンタロー、眩き、ニヤリと笑う。

ケンタローがサーブを打つ。ルイが返す。ケンタローが先ほどよりも際どいコースに返す。ルイ、追いつけない。

× × ×

本気でプレイし始めたケンタローにルイ、徐々に圧倒され始める。

ルイ、ラリーで左右に振られ続け、ショットに追いつけない。

ケンタローのサーブエースやショットが次々と決まっていく。

ルイ「くっそー！」

ケンタロー「元プロさん、調子乗んなよ。手

抜いていたんだよ（笑）」

石黒「そりゃ、まだ無理だよな」

ツヨシ「：可能性は感じますけどね」

× × ×

ルイ、石黒と練習をしている。

沢田（35）が外からコートを見つめている。

沢田、目の前を通ったケンタローに尋ねる。

沢田「すいません、松永ルイさんって方は？」

ケンタロー「ルイですか？」

沢田「はい」

ケンタロー「あいつです」

ケンタロー、ルイの方を指差す。

ケンタロー「呼んで来ましようか？」

沢田「いや、大丈夫です」

沢田、コートの外から、じっとルイを見ている。

沢田、嫌らしい表情でニヤリと笑う。

沢田「あいつか…」

○車いすテニス試合会場／海外

冒頭の試合のブライイングのシーンをインサート。

ルイ、ショットを決める。

観衆「ブー！」

降り注ぐ、観衆の大きなブライイング。

沢田、スタンドから、腕を組んで試合を見ている。

○テニスセンターでのルイの練習を点描で

ルイ、サーブを打つ。

ショットを追いかける。

石黒からの檄が飛ぶ。

石黒「車いすを止めるな！」

石黒「予測して動け！」

石黒「もっと速く漕げ！」

ルイ、ひたすら、車いすを漕いでボールを追いかける。

雨の日も、強烈な日差しが照りつける

日も、夜遅くなっても、練習して

いる。

疲れ果て、コートで車いすごと大の字

になっている。

練習後、スポーツドリンクを一气飲み

する。

○公園でのルイの自主練習を点描で（夜）

ルイ、壁に向かってサーブを打つ。

壁当てでラリーを続ける。

夜の公園に、ショットの音がこだます

る。

ショットにギリギリ追いつき、返す。

ルイ「ああ！」

渾身のショットに、大きな声を出す。

犬の散歩中の老人が、驚き、その激し

い練習を注視している。

○車いす工場

ルイと石黒、車いすの調整に来ている。工場の職人「どうですか？足の位置」

ルイ「いいと思います。ちよつと動いてみていいですか？」

工場の職人「はい、どうぞ」

ルイ、工場の中で車いすを試走する。

ルイ「いいっすね、これなら、ケンタローさんのショットにも追い付けそうです（笑）」

ルイ、嬉しそうにくるくると車いすを動かしている。

○テニスセンター／コート

ルイ、ケンタローと練習試合をしている。

ルイ、見事なチェアワークで、ケンタローのショットに追いつき、返す。

ルイのショットが決まる。

ケンタロー「くっそ」

ケンタロー、明らかに焦っている。

ルイ、ケンタローを左右に振って、試合の主導権を奪っていく。

ルイ「よし、見たか！」

ルイのショットが決まり、試合終了。

石黒「もう、勝ったか……」

ツヨシ、拍手する。

ツヨシ「ルイ、やったな」

ルイ「はい、けど目標はこんなところじゃないですから」

ケンタロー、啞然としている。

○テニスセンター／コート外

ツヨシ、ルイに話し掛けて来る。

ツヨシ「来週初めての大会だろ」

ルイ「はい」

ツヨシ「そこそこ、行けるかもな」

ルイ「そうっすか？」

ツヨシ「ケンタローだって、そこそこのもん

だからな。練習試合とはいえ、そのケンタローに勝った訳だからな」

ルイ「はい」

ツヨシ「まあ、お互い頑張ろう」

ルイ「ツヨシさんと試合出来る様に頑張ります」

ツヨシ「(笑)」

○車いすテニス試合会場／国内

国内で行われている車いすテニス大会の決勝。

ルイとツヨシが戦っている。

× × ×

ルイのショットが決まる。

ツヨシ、呟く。

ツヨシ「そこそこどころじゃねえな……」

× × ×

ルイのショットが次々に決まる。

ツヨシ、クールな表情ながらも、徐々に焦ってくる。

× × ×

石黒、コートサイドで試合を見ている。

石黒「ひよつとするかもな……」

× × ×

ルイのショットが決まる。

ルイ「よっしゃ！」

ルイ、ダイナミックなガッツポーズ。

ツヨシ、天を仰ぐがクールな表情は崩さない。

ツヨシ「……」

審判「ゲームセットアンドマッチ、ルイマツナガ」

× × ×

ケンタロー、スタンドから見て呟いている。

ケンタロー「……あいつ、もう優勝しやがった」

○車いすテニス試合会場／外

ルイ、数人の記者に囲まれて、質問に答えている。

記者1「車いすテニス始めて、僅か半年での優勝ですね」
ルイ「まあ、一応元プロだったんで。通過点にしたいですね」
記者1「はい」
ルイ「けど、思ったより、早くは出来ました」
記者2「次はウィンブルドンですね？」
ルイ「はい、初めての海外での大会ですが、優勝目指してやります」

× × ×

記者たちが散り散りに去って行く。

沢田、ルイに近づいて来る。

沢田「あの…松永さん」

ルイ「はい？」

沢田「私、知っていますんで」

ルイ「えっ、何をですか？」

沢田「例の事ですよ…」

ルイ「…」

ルイ、沢田を強く睨む。

ルイ「例の事？」

沢田「まあ、ではまた…」

沢田、嫌らしく微笑みながら、去って行く。

ルイ、その背中を見続ける。

○車いすテニス試合会場／海外

冒頭の試合のブライニングのシーンをインサート。

観衆「ブー！」

降り注ぐ、観衆の大きなブライニング。

ルイ、それを無視して、サーブを打つ。

○美容院

ルイ、髪を切り、金髪に染め終わった所。

美容師「松永ルイ、いよいよ復活ですね」

金髪のルイ、鏡を見てにやりと笑う。

ルイ「…そうですね」

美容師「お似合いですよ」

ルイ「髪型だけじゃなくて、テニスでも復活

「しますから」
美容師「期待してます（笑）」
ルイ「まあ、見といて下さい。次はウィンブルドンなんで」

○車いすテニス試合会場／イギリス
車いすテニス、ウィンブルドン試合会場。

金髪のルイ、外国人選手と戦っている。
ルイ、ショットを決める。
ルイ、両手を上げて派手なガッツポーズ。

ルイ「よっしゃー！」
観衆「ウオー！」
盛り上がる会場。

○美容院
美容師、スマホを見ている。そこには
「松永類、ウィンブルドン制覇」のネットニュースの記事。
美容師「本当に、復活したよ…」

○テレビ局のスタジオ（夜）
ルイ、スポーツ番組のインタビュウに答えている。
インタビュウアーは女子アナウンサー、杉山モエ。

モエ「今日は、車いすテニスを始めてわずか8ヶ月で、ウィンブルドンを制覇した、松永ルイ選手にお話を伺います。よろしくお願ひします」

ルイ「どうも」
モエ「金髪、お似合いですね」
ルイ「（笑）ありがとうございます」

モエ「松永選手は、もともとプロのテニスプレーヤーだったと」
ルイ「はい、そうです。閉塞性動脈硬化症という病気になってしまって、右足を切断する事になり、そこから車いすテニスを始めました」

モエ「テニスと、車いすテニスの違いに苦勞
しませんでしたか？」

ルイ「まあ初めは。チェアワークって言うん
ですけど、車いすの扱いは特に」

モエ「…」

ルイ「けど、元プロテニスプレーヤーとして
の意地やプライドもあったので、絶対に負
けてなるものかと。死ぬ気で練習しました」

○ケンタローの自宅（夜）

ケンタロー、リビングで妻と子供と一
緒にルイのインタビューを見ている。

ケンタロー「元プロの意地とプライドね…」

○テレビ局のスタジオ（夜）

ルイのインタビューが続いている。

モエ「松永選手には大きな目標があるとお伺
いしましたが？」

ルイ「はい」

モエ「練習の初日にみなさんの前で宣言した
んですよね」

ルイ「まだ誰もやった事のない、男子シング
ル年間グランドスラム制覇、そしてパラリ
ンピック3連覇ですね」

モエ「なるほど」

ルイ「そして、今、障がい者スポーツ、パラ
スポーツって、まだまだ偏見が持たれてい
ると思うんですよ」

モエ「偏見ですか？」

ルイ「はい。まだ100%、スポーツとして
認められてないっていうか。だから、圧倒
的な活躍をして車いすテニスや、パラスポ
ーツの概念を変える様な選手になりたいと
思っています」

○ツヨシの自宅（夜）

ツヨシ、家でテレビを見ている。

彼女が現れる。

彼女「この間、ツヨシが負けた選手？」

ツヨシ「…うん」

○テレビ局のスタジオ（夜）

ルイのインタビュー、終わろうとしている。

モエ「松永選手どうもありがとうございます。これからも頑張ってください」

ルイ「ありがとうございます」

○テニスセンター／コート外

ツヨシ、記者の取材を受けている。

記者「木坂選手、松永選手について、どう思いますか？」

ツヨシ「：ルイの事ですか？」

記者「はい」

ツヨシ「素晴らしい選手なので、一緒に盛り上げて行ければと思います」

記者「松永選手の年間グラندスラム、パラリンピック3連覇は、可能だと思いますか？」

ツヨシ「僕もプレーヤーとして、彼のその夢を叶えさせない様に頑張りたいですね」

記者「松永選手が1年も経たず、ここまで強くなった理由って何でしょうか？」

ツヨシ「そうですね：」

ルイに関する質問が次々と続く。

○テニスセンター／コート（夜）

ツヨシ、1人でサーブを打っている。

ツヨシ「松永、松永って：フッ！」

ツヨシ、強烈なサーブを打ち込む。

ツヨシ「俺だって、いるんだよ：フッ！」

ツヨシ、小声で呟いてサーブを打ち込む。

○雑誌社オフィス

沢田、PCでルイに関しての記事を検索している。

「パラスポーツを変える？金髪のビッグマウス松永類」

「松永類のグラندスラムとパラリン

ピック3連覇は可能なのか？」等の記事。

沢田「いいね、もっと活躍してメジャーになって下さいね：」

沢田、コーヒーを一口含み、嫌らしく笑う。

○車いすテニス試合会場／海外

冒頭の試合のブライイングのシーンをインサート。

ルイ、ショットを決めてガッツポーズ。

観衆「ブー！」

降り注ぐ、観衆の大きなブライイング。

○オフィス

ルイ、オフィスのデスクにいと、城所部長がやって来る。

城所「松永くん」

ルイ「はい」

城所「キミの人気すごみたいだね」

ルイ「そうですか？」

城所「会社にも問い合わせ結構あるらしいよ。いや、キミみたいな人、採用して良かったよ。で、話があるんだけど：」

ルイ「はい？」

城所「今度、うちの新商品のCMにさ、出ないかって、宣伝部から連絡があったんだよ」

ルイ「CMっすか？」

城所「CMだよ。給料とは別に出演料も払ってくれるらしいよ」

ルイ「どんなCMですか？」

城所「ビッグチョコアイスって、商品なんです。ビッグマウスに、ビッグチョコアイスって、松永くんが思いっきり齧るってCMなんだって」

城所、アイスを齧る仕草をする。

ルイ「はあ、くだんないCMですね（笑）」

城所「まあ、くだんないよね（笑）。せっかくだし、考えといてよ」

ルイ「はあ」

城所「また、詳しい話あったらするから」
城所、去って行く。

○弁護士事務所／応接室

ルイ、弁護士の話を聞いている。

弁護士「松永さんは、現在はサラリーマンとして、お勤めですね」

ルイ「はい」

弁護士「松永さん、プロになるつもりはございませんか？」

ルイ「プロ？」

弁護士「はい、プロの車いすテニスのプレーヤーです」

ルイ「はあ」

弁護士「とあるスポーツメーカーから、松永さんのスポンサーになりたいという話がありました」

ルイ「スポンサーですか？」

弁護士「はい、松永さんが、プロになるつもりがあれば、他にもいくつかスポンサーになりたい企業を集めることが可能だと思います」

ルイ「…」

弁護士「悪い話ではないと思いますが」

ルイ「ちよつと、考えてみてもいいですか？」

○テニスセンター／コート外（夕方）

ルイ、練習終わり。錦戸親子が近づいて来る。車いすの息子、車いすを押し父親。

錦戸父「あの、すみません」

ルイ「はい」

錦戸息子「サイン貰えませんか？」

息子、サインペンと色紙を差し出す。

ルイ「あ、はい」

ルイ、サインを書きながら話を聞く。

錦戸父「こいつ、松永選手のファンでして」

錦戸息子「僕も、松永選手みたいなテニス選手になるんだ」

ルイ「そうか」

錦戸父「松永選手のおかげで、夢が出来た様
で」

ルイ、息子に向かって。

ルイ「君が大人になる頃までにパラスポーツ
の世界は変わっているぞ。もっと注目を浴
びて、もっと人気が出ている筈だ」

錦戸息子「うん」

ルイ「期待していてくれ」

ルイ、色紙とサインペンを返す。

錦戸息子「頑張って下さい」

錦戸父「ありがとうございました」

錦戸親子が去って行く。

ルイ、去って行く2人をじっと見つめ
ている。ルイ、呟く。

ルイ「あと、女の子にもモテる様になるぞ…」

○障がい者用トイレの中

とあるビルの障がい者用トイレの中。
便座に座るルイの上に、モエが騎乗位
でまたがっている。

激しくグラインドする、モエ。

ルイ「ヤ、ヤバイ、出るって、もう我慢でき
ねえ…」

○障がい者用のトイレの出口

モエ、周りを気にして人がいない事を
確認して出て来る。

ルイ、後に続いて義足でゆっくりと出
て来る。

ルイ「たまにはこういうところも興奮するだ
ろ」

モエ「こういうところって…」

ルイ「いつも一緒じゃ、面白くないだろ(笑)」

モエ「けど、よりによって」

ルイ「障がい者用って書いてあるからさ、い
いんだよ。SEX禁止とは書いてないから」

モエ「…何よ、それ」

○道路(夜)

ルイ、車を運転している。

綺麗な夜景をバックに走る車。

モエ「プロ？」

ルイ「うん、スポンサーになりたいって、企業がいろいろらしいんだよ。弁護士に言われた」

モエ「すごいじゃない」

ルイ「まあ」

モエ「もう、決めたの？」

ルイ「まだ返事はしてないけど、俺の中では決まっている」

モエ「そう」

ルイ「あのさ……」

モエ「うん」

ルイ「俺はさ、いつか、パラスポーツ史上一番稼ぐプレーヤーになりたいと思うんだ。普通のプロテニス選手に負けなくらいの」

モエ「うん」

ルイ「そうだったらさ、結婚してくれないか？」

モエ「……いいわよ。スーパースターになったらね」

ルイ、微笑む。

ルイ「ありがとう」

モエ「待ってるわ。けど、いつになるの？」

ルイ「出来るだけ急ぐよ」

モエ「ババアになる前にしてよね（笑）」

ルイ「ああ、ババアは俺も嫌だ（笑）」

○居酒屋（夜）

沢田、酒を飲みながら、居酒屋のテレビでニュースを見ている。

スポーツコーナーで、ルイのインタビューが流れ始める。

沢田、テレビに注目する。

テレビの中に、テニスコートで答えているルイのインタビュー。

ルイ「人生掛けてやって来たテニスが出来なくなっただけ、本当に辛かったです。死のうとすら、思っていました。けど、車いすテニスのおかげで、人生の夢や目標が出来て……」

× × ×
ルイ「全く違う競技で難しいです。けど、楽しいですね。その難しさも。死ぬ気で練習してますよ」

× × ×
ルイ「最終的には、自分を救ってくれた車いすテニスやパラスポーツに恩返しじゃないですけど、その常識を変える様なプレーヤーになりたいですね」

沢田の横の席の酔っ払い、テレビをじっと見ている。

酔っ払い「頑張って欲しいねえ：」

沢田、テレビと酔っ払いを見ながら、嫌らしく笑う。

沢田「そろそろ行きますか：」

○コンビニ

モエ、雑誌を立ち読みしている。

モエ「：」

モエ、啞然としている。

その雑誌に書かれた記事の見出し。

「金髪ビッグマウスの車いすテニスプレーヤー松永類は、作られた障がい者だった」

モエ、喰い入る様に見ている。

○テレビ局のスタジオ（夜）

夜のニュース番組。

キャスターが語っている。

キャスター「記事によると、1年半程前、松永ルイ選手は右膝の度重なる怪我によって、テニスプレーヤーとしての未来を断たれた。そして、自ら足を切って、障がい者となり、車いすテニスに転向したと書かれています」

スタジオには、キャスター以外にコメントレーターと元プロテニスプレーヤー。

コメントレーター「本当なんですかね？」

キャスター「記事によりますと、昨年亡くなった松永選手のプロテニス時代のコーチ、

伊達コーチですね。彼の日記が出て来て、それを記者が遺族から受け取ったとなつています」

元テニスプレーヤー「そうですか」

○雑誌社オフィス（夜）

沢田、同僚とテレビを見ながら、嬉しそうに。

沢田「…いよいよ、始まったよ」
嫌らしく笑う。

○ルイの自宅（夜）

ルイもテレビでニュースを見ている。

ルイのスマホに、モエからメール（LINE）が来る。

モエ「ニュースになっている事って、ホントなの？」

○テニス試合会場

1年半程前。金髪のルイ、試合をしている。

まだ、両足がある。

サーブを打つルイ。相手が返す。

強烈なラリーが続く。

ルイの両足が、素早く走る。

そして、華麗に止まる。

見事なショットを決めるルイ。

審判「ゲームセットアンドマッチ、ルイマツナガ」

○ロッカールーム

ルイと、伊達コーチ。

伊達「よくやった」

ルイ「決勝も、このまま行きますよ！」

伊達「油断するなよ」

ルイ「グラウンドスラム勝つ為に生きているんですから、こんなところで負ける訳にはいかないですよ」

伊達「そうだ、お前はグラウンドスラムを勝つ為に生きている。お前の実力を出せば絶対

勝てる！」
ルイ「はい」
伊達「けど、いいか。油断だけはするな。分
かったか」
ルイ「はいっ！」

○テニス試合会場

ルイ、決勝の試合に臨む為にコートに入
り込んで来る。
試合前、コート中央で対戦相手との握
手。
絶対に勝つと強く決意したルイの顔、
目。
ルイ、サーブを打つ。
激しいラリーが続く。
ルイの両足が、素早く走る。そして、
止まる。ショットが決まる。
ルイ「よしっ！」

まずはルイがポイントを取ります。

× × ×
試合が続く。激しいラリー。
お互いにポイントを取り合って譲らな
い。

× × ×
相手がショットを打つ。
ルイ、追いかける。

(スローモーションになる)

サポーターを巻いた、ルイの右足が変
な方向に曲がる。
ルイ、倒れる。
ルイの横を相手のショットが抜けて行
く。

伊達が走り寄る。
ラケットを投げ捨て、右足を抱えて転
げ回るルイ。
遙か彼方に、救急車のサイレンが聞こ
える。
暗転。

○病院／病室

ルイ、ベッドの上に寝ている。
右足が包帯でグルグル巻きになっている。

ルイの母、松永五月（45）がお見舞いに来ている。

伊達、病室に入ってきて来る。

伊達「お母さん、来てましたか」

五月「伊達さん、いつもお世話になってます」

伊達「ちよつと、ルイくんと2人で話がいんです」

五月「はい、じゃあちよつと飲み物でも買って来ます」

五月、病室を出て行く。

伊達、ベッドの横の椅子に座る。

伊達「ルイ」

ルイ「はい」

伊達「先生と話して来た」

ルイ「僕の右足って」

伊達「…」

ルイ「伊達さん…」

伊達「…また膝の靱帯だ」

ルイ「…」

伊達「日常生活には問題ない」

ルイ「…」

伊達「ただ」

ルイ「…」

伊達「もう、テニスは無理って事だ…。少なくともプロのレベルでは」

ルイ「えっ？」

伊達「もう4回目だ。お前の膝はもうポロポロなんだ…」

ルイ「そんな」

○病院／病室（夜）

ルイ、1人で寝ている。

ルイ「…な、何でだよ」

ルイの目から大量の涙が溢れ出る。

○ルイの自宅

ルイ、昼から部屋でお酒を飲んでいる。

無精髭、金髪の根元が黒くなって来ている。

ルイ「ああ……」

ルイ、酩酊状態。

テニスラケットを壁に叩きつけて折ってしまう。

折れたラケットをじっと見るルイ。

ルイ「何の為に生きていけば、いいんだよ……」

1人号泣するルイ。

○踏切

ルイ、酒缶の大量に入ったコンビニの袋を持って歩いている。

虚ろな目で、踏切を行き交う電車を見ている。

飛び込もうかとも考えている。

ルイ、ただひたすら電車を見ている。

○雑居ビルの屋上

酒の入った袋を持ったままのルイ、1人で立っている。

下を見下ろす。しかし、飛び降りる決心はつかず、立ち続けている。

○ルイの自宅（夜）

伊達がやって来る。

グチャグチャの部屋。酩酊状態のルイ。

ルイ、じっと包丁の先を見ている。

伊達「おい、何をしているんだ」

ルイ「これで、心臓、刺したら死ぬますかね？」

伊達「変な気起こすな！」

ルイ「痛いですかね？」

伊達「いいから、置け。それ」

ルイ、包丁を床に落とす。

伊達、折れたラケットを手にする。

伊達「こんなにしちゃって」

ルイ「伊達さん、俺さあ、テニスで世界獲得に生きて来たんだよ。テニス無くなったら、どうすればいいんだよ」

伊達、ルイを抱く。

ルイ「俺さあ、テニスしか、した事ないんだよ」

伊達「…」

ルイ「どうすりゃいいんだよ…」

ルイ、号泣。

伊達、ルイを更に強く抱く。

○公園

数日後。ルイと伊達、ベンチで座って話している。

伊達「なあルイ、お前、車いすテニスやってみないか？」

ルイ「車いすテニス…？」

伊達「変な事言うけどな」

ルイ「はい」

伊達「お前の右足を無くすんだ」

ルイ「右足を…？」

伊達「死ぬくらいなら、右足無くすくらい大した事ないだろ」

ルイ「…」

伊達「なあ、ルイ。車いすテニスやっている奴らは、所詮、車いすの中でテニスの上手い奴らだ。健全者の中でプロになったお前とは比べものなんかにならない」

ルイ「…」

伊達「お前のショットやサーブの才能、パワーがあれば、あいつらに負ける訳が無い」

ルイ「…」

伊達「本気でやれば、車いすテニスってものを変えられるくらいなの、プレーヤーになれる。お前が夢だったグラندスラムだって余裕で獲れる」

ルイ「…」

伊達「死んだり、どうでもいい人生送るくらいなら、お前の才能、世の中変える為に使ってみたらと、思ってたな」

ルイ「…」

伊達「あくまで、提案だ。無理してする事じゃない」

ルイ「右足はどうやって？」

伊達「俺の知り合いの医者に。病気だって事にしてやって貰うよ」

ルイ「…」

伊達「焦る話じゃない、ゆっくり考えてくれ」

ルイ「…」

○病院／外

伊達、車いすに乗ったルイを押し出
て来る。

伊達、小声でルイに話し掛ける。

伊達「ルイ」

ルイ「はい」

伊達「お前は、これから、車いすテニスの歴史を変える為だけに生きるんだ」

ルイ「…はい」

○テレビ局のスタジオ（夜）

ニュース番組の収録。先ほどの番組が
続いている。

キャスター「松永選手は閉塞性動脈硬化症と言っていました、これは嘘で、コーチと相談の上で自ら足を失ったという事ですね。これ、どう思いますか？」

コメンテーター「本当だとしたら、とんでもない事です。私は結構、彼のファンだったんです。一切彼の応援するのをやめます。車いすテニスの大会にも出るべきではない。コーチも最低だっ！」

元テニスプレーヤー「私も感情的には思うところがあります。けど理屈で考えれば、オリンピック出る為に国籍を変える選手がいる訳で、パラリンピック出る為に右足無くす人がいたってね…」

コメンテーター「それとこれとは、全然違う！」

元テニスプレーヤー「あくまで理屈の話ですよ」

コメンテーター「いや、理屈もクソもない。これは最低ですよ」

× × ×

キャスター「えー、ちなみにですね。パラリンピックの出場資格というのは、聴覚、知的、精神以外の障がい者という事なんです。車いすテニス、松永選手の出場する下半身に障がいのある方のクラスと、クアードという上半身にも障がいがある方が出る2つのクラスがあるという事です」

○街頭インタビュ―

テレビ番組の街頭インタビュ―「松永類選手の疑惑に関してどう思う？」。

老若男女の様々な人の意見をオムニバスで。

「もう、感動を返せって思います」

「私は、松永選手より、コーチが悪いと思う」

「ありえない、パラスポーツをバカにしていますよ」

「私、めっちゃファンで応援していただけに残念です」

「けどまあこれで、車いすテニスが盛り上がりばいいんじゃないですか？」

「こんな奴、許されないよ、顔も見たくない！」

「足切る勇気はすごいよね」

「スポーツマンシップのかけらもないね」

「これってルール違反なんですかね、私は別にいいと思う」

「私は応援するのをやめました」

様々な声が徐々に重なって行く。

○テニスセンター／コート

ルイ、コートに入ってくる。

ルイが入って行った途端、周りの人々がルイを避けるように去って行く。

ツヨシがルイに近づいて来る。

ツヨシ、小声でルイに話し掛ける。

ツヨシ「お前、見損なっちゃよ」

ルイ「…」

ツヨシ「俺たちの事、バカにすんじゃないやねえよ」

ツヨシ、ルイを睨みながら去って行く。

× × ×
ルイの元にケンタローがやって来る。

ケンタロー「なあ」

ルイ「何っすか？」

ケンタロー「ちよつと、話いいか？」

ルイ「：説教っすか？」

ケンタロー「（笑）いや、逆だ。：お前、よくやっとな」

ルイ「えっ？」

ケンタロー「報道の通りだとしたら、お前はよくやっただと思っよ。俺はね」

ルイ「どういうことっすか？」

ケンタロー「だいたいさ、スポーツって言うたって、俺たちみたいなのが集まって、やっっているだけだ」

ルイ「：」

ケンタロー「お前さ、車いすテニスの競技人口って何人いるか知ってるか？」

ルイ「いや」

ケンタロー「たった、650人だぜ。男で。それで、金メダルだ、オリンピックと同じ価値があるって騒いでもさ、所詮さ、井の中の蛙なんだ。俺たち全員」

ルイ「：」

ケンタロー「お前はそれをはっきりと俺たちに突きつけてくれたんだよ」

ルイ「：」

ケンタロー「ツヨシは怒っているけど、俺はさ」

ルイ「：」

ケンタロー「お前みたいなやつがいてもいいんじゃないかと思ってる」

ルイ「：」

ケンタロー「まあ、頑張れよ」

× × ×

ルイと石黒、練習を始めようとしている。

石黒「じゃあ、始めようか」

ルイ「石黒さんは聞かないんですか？」

石黒「：」

ルイ「…」
石黒「俺の仕事はさ、お前に文句言ったり責めたりする事じゃなくて、車いすテニスを上手くやって貰う事だ。俺はその仕事を全力でやる。ただそれだけだ」
ルイ「…」
石黒「じゃあ、やろうか」
ルイ「ありがとうございます」

○テニスセンター／コート外（夕方）

ルイがコートから出て行くと、様々な記者たちが集まって来る。

記者から質問が浴びせられる。

「松永選手、記事はホントでしょうか？」

「ご自身の口で語られる事は？」

「会見の予定などは？」

「松永選手、早く説明した方がいいと思います」

「一言、ただけませんか？」

ルイ、記者たちを無視して、車いすを前に進め続ける。

○テレビ局スタジオ（夜）

ニュース番組の収録が行われている。

キャスター「いまだ、松永選手の口から真実が語られる事ありません」

コメンテーター「何なんですかね、本当に。

彼はね、世間を騒がせているんだ。会見くらい開くべきですよ！」

元プロテニスプレーヤー「確かに真偽をハッキリと自分で喋った方がいいですね」

○ルイの自宅（夜）

ルイのスマホに着信がある。

「母ちゃん」の文字。

ルイ、出ずに切る。

ルイ、モエの番号を探して、電話する。

ルイ「もしもし、あのさ…」

モエ「ルイくん、ごめん、もう終わりにしよ。

私、無理だ」

ルイ「…そうか」

○弁護士事務所／応接室

ルイ、弁護士の話を聞いている。

弁護士「先方からですね、スポンサーの話は無かった事でお願いますと」

ルイ「(笑) そうですよね」

弁護士「はい。残念ですが、やはり企業さんとしてもイメージを気にしますので」

ルイ「はい、分かりました」

○オフィス／会議室

ルイと城所部長、会議室で2人きりで話している。

城所「松永くん、あの話って本当なの？」

ルイ「あの話って…」

城所「自分で右足切ったってさ」

ルイ「…」

ルイ、暫し沈黙。

城所「ああ、言いたくないのね、まあいいよ。

無理やり聞く訳にもいかないしね」

ルイ「すいません」

城所「けどね、会社に苦情の電話とか、メールとかさ、スゴイのよ。あんな奴、何で雇っているんだとか、クビにしろとか、もうさ電話もパンクしてメールも読み切れないくらい」

ルイ「すいません」

城所「でね、当然なんだけど、この間、言っただCMの話は、無しね」

ルイ「はい」

城所「今、松永くんのCM流して、売れる訳ないもんね(笑)」

ルイ「…」

城所「ごめん。あとね、ここからが本題というか言いにくい話なんだけど…」

ルイ「はい」

城所「…松永くん、会社辞めてくれないかな？」

ルイ「会社を、ですか？」

城所「あ、いや、クビにとか言う訳じゃなくて、あくまでも自主的に辞めて貰えないかなっていうお願い。このままだと不買運動とか起きかねない様な騒ぎだしさ」

ルイ「…」

城所「あと、障がい者雇用の助成金の問題とかも出て来かねない訳。そうなる前にさ」

ルイ「…」

城所「上とは話し合って、退職金少し多めに貰える様にしたからさ。考えてみてよ。いや、考えてみてよって言うよりも、お願い。辞めて下さい」

城所、急に立ち上がり大げさに、ルイに頭を下げる。

○テニスコート

ルイ、車いすに乗ってプレイしている。そこに次々と罵声が飛ばされる。

「やめろ」「死ね」「車いすテニスなめんじゃねえ」「お前の顔なんか見たく無い」「一生プレイするな」「お前もコーチも最低だ」等。

ルイ、声を無視してプレイする。声がだんだん大きくなって行く。罵声を浴びせる人々の口元。

○ルイの自宅（夜）

ルイ、突然ベッドの上で起きる。それは、夢の中で出来事だった。ルイ、大量の汗をかいている。

○キャバクラ（夜）

沢田、キャバクラで豪遊している。

キャバ嬢1「ひさしぶりですね」

沢田「ちよつと、臨時ボーナスがあったもので」

キャバ嬢2「へえ」

沢田「松永ルイって、知ってる？」

キャバ嬢1「ああ、車いすの」

キャバ嬢2「自分で足切ったって人？ニュー

スでやってた」

キヤバ嬢 1 「ありえなくない」

キヤバ嬢 2 「絶対痛いよね」

沢田 「みんなが奴について、騒いでくれる程、僕、褒められるんだよ」

キヤバ嬢 1 「何ですか、それ？」

沢田 「まあ色々あるのよ」

沢田、嫌らしく笑いながら、シャンパンを一気に飲む。

○テニスセンター／コート

ルイ、石黒と次の大会に向けて、練習をしている。

そこに、スーツの男（日本パラスポーツ推進機構職員）がやって来る。

スーツの男 「すいません、ちょっと話いいですか？」

○テニスセンター／クラブハウス

ルイとスーツの男が話している。

ルイ 「辞退って、どういう事ですか？」

スーツの男 「大会本部から、松永さんの出場は倫理的な観点から、今回はやめて欲しいという話があったんです」

ルイ 「けど、アジアパラにはパラリンピックの出場権が……」

スーツの男 「それはそうですが……」

ルイ 「……」

スーツの男 「苦情のメールとか電話が沢山来ているようです。松永さんを出場させる事への……」

ルイ 「……」

スーツの男 「脅迫も。本部としては円滑に大会を開催する為にも、辞退して頂きたいとの事です」

ルイ 「そんな」

スーツの男 「これは私の意見ですが、自分で切ったのではないのであれば、会見して、はっきりと仰ったらどうですか？ そうすれば全て解決します」

ルイ「：」
スーツの男「パラスポーツは、スポーツとして見て欲しいんです。ワイドショーのネタとして注目して欲しいんじゃないんです」
ルイ「：これってスポーツですか？」
スーツの男「：スポーツですよ」

○テニスセンター／コート外（夕方）

ルイ、帰ろうとする。錦戸親子がやって来る。父親が息子の車いすを押している。

錦戸父「あの、すみません」

ルイ「はい」

錦戸父「先日はどうも」

ルイ「：ああ」

錦戸父「この子が一言、どうしても言いたいです」

錦戸息子「この間はサインありがとうございました」

ルイ「：」

錦戸父「：」

錦戸息子「あのさ、僕、どんなことがあっても松永選手の事、応援してます！」

ルイ「えっ？」

錦戸息子「どうして車いすに乗っているのかとか関係なくて、車いすでもスポーツですーパー스타になれるってことを見せて欲しいんです」

ルイ「：」

錦戸息子「そしたら、僕も頑張れるから」

ルイ「：そうか、ありがとう」

錦戸父「こんな事、こいつの前で言う事じゃないけど、あの話が本当なら、正直、私はあんたが大嫌いだ。軽蔑する。息子たちの様な、歩けず車いすで苦しんでいる人間を全員バカにしているのかって思う」

ルイ「：」

錦戸父「けど、こいつがあんたの活躍で、夢とか見れるんだったら、俺は全力であんたを応援するよ」

ルイ「…」
錦戸父「こいつのためにも頑張ってくれ」

○ルイの自宅（夜）

ルイ、何かを考えている。
暫くして、意を決して、スマホでモエに電話を掛ける。

ルイ「うん、独占インタビュー。スクープだろ。…ただし条件がある。ノーカット、編集なしで。あと、生で放送する事…」

○テレビ局スタジオ（夜）

翌日の夜。ルイとモエが対談形式で向かい合っている。

○居酒屋（夜）

沢田、テレビを見ている。

沢田「来たね」

横の席には、先日、ルイのニュースを見て応援していたのと同じ酔っ払い。

酔っ払い「俺、こいつ、大嫌いなんだよね」

沢田、横の酔っ払いを見て、嫌らしく笑う。

○ツヨシの自宅（夜）

ツヨシ、固唾を飲んでテレビを見ている。

○テレビ局スタジオ（夜）

モエ、ルイにインタビューする。

モエ「松永選手、まず率直に聞きます。右足を自ら切られたという報道がありました、それは真実ですか？」

ルイ「はい、真実です」

モエ「…」

ルイ「自分で、というか、当然、医師に頼んで切ってもらいました」

モエ「なぜ、その様な事を？」

ルイ「もともと、プロのテニスプレーヤーとして、グラウンドスラムを獲って、スーパ―

スターになる事を目標にしてやっています

モエ「はい」

ルイ「しかし、右膝を何度も怪我してしまい、もはや、プロのテニスプレーヤーとしてはやっつけられなくなりまして。ただ、テニスしかやった事なくて、テニスだけの為に生きて来たので、どうしたらいいのか分からなくなりに、自暴自棄の状態になりました。そんな時に、伊達コーチから、足を切つて車いすテニスに転向しないかと、話がありました」

モエ「それで？」

ルイ「はい、切りました」

モエ「今の世間の反応に関してどうお考えですか？感動を返せという声もありましたか？」

ルイ「誰も感動してくれなんてお願いした覚えはないのですが」

モエ「反省や謝罪の気持ちなどは？」

ルイ「(笑)。誰に何で謝るんですか？誰かに迷惑掛けましたか？」

モエ「世間を騒がした事などに関して」

ルイ「世間って誰ですか？」

モエ「？」

ルイ「僕が泣いて謝るのを、期待している人たちですか？」

モエ「：い、いや」

ルイ「：ただ、1つどうしても言いたいことがあります。次回の大会、アジアパラ、これはパラリンピックにも繋がる重要な大会です。その大会本部の方から、倫理的な面で問題がある。またそういった意見や苦情が多いので、出場を辞退して欲しいと言われました」

モエ「？」

ルイ「倫理ってなんですか？車いすテニスつて、スポーツなんじゃないですか？スポーツなら、同じ条件でやっつけ勝つ方が、強いんじゃないですか？同じ条件にする為に、

僕は足を切ったんです」

○ケンタローの自宅（夜）

ケンタロー、ニヤニヤ笑いながら、妻とテレビを見ている。

ケンタロー「相変わらず面白いやつだな」

ケンタローの妻「：私は好きじゃないけど」

○テレビ局スタジオ（夜）

ルイのインタビューが続いている。

ルイ、カメラ視線で話している。

ルイ「車いすテニスは福祉事業でやっているんですか？スポーツだって言っているのに、倫理とか言って、同じ条件で戦おうとしている僕を締め出して、ぬるま湯の中で戦って、優勝して満足ですか？」

○ツヨシの自宅（夜）

ツヨシ、テレビを見ながら、グラスを壁に叩き付ける。

グラスが割れて飛び散る。

テレビの中のルイ、挑戦的な目でカメラを、その向こうのツヨシを見ている。

○テニスセンター／コート外

翌日。ツヨシ、囲み取材に答えている。

ツヨシ「松永ルイの出場を認めないのであれば、僕も出ませんと大会本部には伝えました」

○テニスセンター／コート

ルイとツヨシ、すれ違うが一切目を合わせない。

○テニスセンター／コート（夜）

ルイ、ナイターで必死に練習している。

隣のコートではツヨシも必死に練習している。

互いのボールが打つ音が響き続いている。

お互いに相手を意識して、先に終わってなるものかと意地で練習を続ける。ボールの音が響き続ける。夜が更けて行く。

○テニスセンター／コート外（夜）

練習が終わり、ルイが出るとモエが来ている。

モエ「この間はどうぞも」

ルイ「取材か？」

モエ「そうよ。けど、良かったわね。出られる様になつて」

ルイ「お陰様で」

モエ「大会終わったら、また独占インタビュー、お願いね」

ルイ、モエを手招きする。

モエ「ん、何？」

ルイ、モエの耳に囁く。

ルイ「1回、ヤラしてくれたら、いいよ」

モエ「何、それ最低」

ルイ「けど、視聴率は獲れるぜ（笑）」

モエ「考えとくわ（笑）」

ルイ、車いすで去って行く。

○ルイとツヨシの大会前の練習風景を点描で

昼のテニスセンターで練習するルイ。

夜のテニスセンターで練習するツヨシ。

夜の公園で練習するルイ。

早朝の公園で練習するツヨシ。

家で筋トレするルイ。

ジムで上半身を鍛えるツヨシ。

ラケットのガットを張り替えるルイ。

車いすの調整をするツヨシ。

○車いすテニス試合会場／海外／外観

アジア某国で行われているアジアパラ競技大会。

車いすテニスの試合が行われるスタジアムに次々と、観客と報道陣が入って行く。

モエと沢田の姿も見える。

○車いすテニス試合会場／海外

コートでは、ルイの1戦目。ルイのショットが決まる。

ルイ、派手なガッツポーズ。

ルイ「よし！」

審判「ゲームセットアンドマッチ、ルイマツナガ」

× × ×

ツヨシの1戦目。ツヨシのショットが決まる。

ツヨシ、クールな表情を崩さない。

ツヨシ「…」

審判「ゲームセットアンドマッチ、ツヨシキサカ」

× × ×

ルイの2戦目。ルイのショットが決まる。

ルイ、派手なガッツポーズ。

ルイ「よっしゃ！」

審判「ゲームセットアンドマッチ、ルイマツナガ」

× × ×

ツヨシの2戦目。ツヨシのショットが決まる。

ツヨシ、クールな表情を崩さない。

ツヨシ「…」

審判「ゲームセットアンドマッチ、ツヨシキサカ」

× × ×

ルイの3戦目。ルイのショットが決まる。

ルイ、派手なガッツポーズ。

ルイ「きたぜ！」

審判「ゲームセットアンドマッチ、ルイマツナガ」

× × ×

順調に勝ち進む2人。

ツヨシの3戦目。相手はケンタロー。

ツヨシのショットが決まる。
ツヨシ、クールな表情を崩さない。

ツヨシ「…」

審判「ゲームセットアンドマッチ、ツヨシキ
サカ」

ツヨシとケンタロー、試合後の握手。

ケンタロー「ルイとの決勝、楽しみにして
ぜ」

ツヨシ「ああ…」

○ロツカールーム

決勝前のロツカールーム。

ツヨシ、一人で座り、イヤホンで音楽
を聴きながら集中している。目を閉じ、
じつと心を落ち着けている。

ツヨシ「…」

× × ×

もう1つのロツカールームでは、ルイ
がカバンから伊達の写真を出して見て
いる。ルイ、呟く。

ルイ「思いつ切り、ぶっ潰してやるから、見
ていて下さい…」

ルイ、ニヤリを笑う。

○車いすテニス試合会場／海外

コートでは、いよいよ決勝戦が始まる。

(冒頭のシーンの試合)

試合前の握手。

ルイとツヨシ、一切目を合わさないま
ま握手。

モエ、観客席で見ている。

モエ「いよいよね…」

観客席の片隅に腕を組んで見る沢田。

観客席の通路には、ケンタロー。

○錦戸親子の自宅／リビング

家のテレビで試合を見る錦戸親子。

錦戸息子「頑張れ…」

○車いすテニス試合会場／海外

ツヨシのサーブから始まる。
ラリーの後、ツヨシのショットが決ま
る。

ツヨシ、クールな表情を崩さない。

ツヨシ「…」

観衆「ウオー！」

× × ×

ルイのショットが決まる。

ルイ、派手なガッツポーズ。

ルイ「よし！」

観衆「ブー！」

観衆、大きなブーイング。

ルイ、眩く。

ルイ「ブーイングも歓声…」

× × ×

2人の激しい試合。

ルイとツヨシのラリーが続く。

× × ×

ルイのショットが決まる。

1セット目はルイが獲る。

ルイ、派手なガッツポーズ。

ルイ「よっしゃ！」

観衆「ブー！」

審判「ゲームアンドセット、ルイマツナガ」

モエ「1セット目は、ルイくん」

× × ×

ツヨシのショットが決まる。

2セット目はツヨシが獲る。

ツヨシ、クールな表情のまま。

ツヨシ「…」

観衆「ウオー！」

審判「ゲームアンドセット、ツヨシキサカ」

ケンタロー「ツヨシも譲らねえな…」

○ 錦戸親子の自宅／リビング

家のテレビで試合を見る錦戸親子。

錦戸息子「次のセットだね」

錦戸父「ああ」

○ 車いすテニス大会会場／海外

ツヨシのサーブで3セット目が始まる。

× × ×

審判「フォォーテイー、ラブ」

ルイ「あと、1本だ…」

ツヨシ「…」

ツヨシ、追い込まれ悲壮な表情。

モエ「これは、ルイくんの勝ちね…」

ケンタロー「ツヨシ、ピンチ…」

沢田、静かに見守っている。

× × ×

ルイ、ショットを打つ。

ラインギリギリにボールが飛ぶ。

ルイ「よしっ！」

ケンタロー「決まったな」

(スローモーションになる)

ラインギリギリに打たれたボール。

ツヨシが全力で腕を伸ばして、辛うじて追いついて返す。

返って来たツヨシのショットを、ルイ、取れない。

(スローモーション終わる)

ルイ「読まれた…!!」

ケンタロー「いや、意地だ…」

× × ×

ツヨシ、連続で3本ショットを決める。

× × ×

ルイ、啞然として、ラケットを落とす。

審判「ゲームセットアンドマッチ、ツヨシキ

サカ」

観衆「ウオー！」

観衆、大きな拍手と大歓声。

ツヨシ「やった…」

ツヨシ、クールな表情から、一転。今までの姿からは想像出来ない程、感情を爆発させる。

ツヨシ「勝った…」

ツヨシ、両手を挙げて、泣きながらのくちやくちやの笑顔で喜ぶ。

沢田、急ぎ足で会場を後にする。

ケンタロー、拍手をする。

ケンタロー「まさかな…」
ルイ、呆然自失。

○錦戸親子の自宅／リビング
家のテレビで試合を見る錦戸親子。
錦戸息子、残念そうに見ている。
錦戸息子「負けちゃった…」

○車いすテニス大会会場／海外／コート外
試合後のルイ、頭からタオルを被っている。肩が小刻みに揺れている。泣いている？

モエ、後ろから心配そうに声を掛ける。
モエ「ルイくんでも試合に負けて泣くことあるんだ」

ルイ「ん？」

ルイ、タオルを取る。

ルイ「誰が泣いているって？」

ルイ、笑っていた。

ルイ「こう、来なくっちゃ。やりがいねえだろ。次はぜってえ、勝つ！」

ルイ、手元の空のペットボトルを握り潰す。

ルイ、これからの挑戦が待ちきれない様に満面の笑みを浮かべている。

終